

「～ずにはおかない」表現の用法と共起語 — 新聞記事と文学作品との比較を通して —

松岡知津子・岡本 智美

The Usage and Co-occurrence of the *-zu ni ha okanai* Phrase — a Comparison of Newspaper Articles and Literary Works —

MATSUOKA Chizuko, OKAMOTO Tomomi

〈Abstract〉

When teachers show grammatical structures to learners, they explain the basic meaning of those phrases and point out some words and expressions they frequently co-occur with, for the purpose of improving students' grasp of the structures. However, it is not easy to give such examples, and improper usage examples abound on the Internet. To clarify the distribution of the *-zu ni ha okanai* expression, this study compares newspaper articles and literary works. The findings show that the "spontaneous" meaning is frequent in newspaper articles, while the "volition" meaning is prevalent in novels. Moreover, the "spontaneous" meaning frequently occurs with predicates with emotional meaning or predicates denoting a change caused to the other participant, while the "volition" meaning occurs with predicates denoting aggression. For the purposes of teaching, in addition to the explanation of the basic meaning, it would be more efficient to touch upon such co-occurring words and expressions, as well as the respective media of occurrence.

キーワード：共起語 新聞記事 文学作品 自発 意志

1. はじめに

多くの日本語教師は、新しい文型を日本語学習者に提示する際、その文型の本質を表しているような例文や、その文型がよく使われるような例文をいくつか示し、学習者の理解を促すであろう。また、その文型がどのような語と共起しやすいか、どんな場面で用いられやすいかといった情報を与えることが重要であるだろう。中俣（2011 a）においても、今後の日本語教育文法に必要なのは、前後に共起する語彙にまで踏み込んだ調査であろう、と述べている。また、中俣（2011 b）においては、「よく共起する語彙がわかれば、授業で導入や例文に使うときにどんな語彙を使えばよいか、どんな練習問題を作ればよいかという指針になる」と述べられている。

しかしながら、現状ではそのような研究はまだ少なく、例文の提示もなかなか容易では

ない。石橋 (2007) は、「日本語の指導者はテキストの例文以外にいくつかの例文を用意します。しかし、2 文ぐらいはすぐ作成できますが、5 文、6 文となると同じような例文になってしまい、例文作成に苦労するものです。」と述べている。

このように、日本語教師は日々例文の作成に苦労しているわけであるが、その際に日本語教師が手軽に例を収集できるのがインターネットからの例である。しかし、インターネットにはいろいろな例が氾濫しており、正しいものが必ずしも検索結果の上位に来るとは限らない。松岡・岡本 (2011) は、「～ずにはいられない」を例にとり、インターネット上にみられる表現に多くの文法的逸脱が見られたことを指摘している。

例文作成が容易でない表現文型はいろいろあるが、「～ずにはおかない」という文型もそのひとつである。この文型は、国際交流基金 (2006) の『日本語能力試験出題基準』では、1 級に分類されている。

2010 年の試験改定後は、出題基準は非公開となったが、「新試験対応」と銘打った問題集などにおいても依然としてこの文型は扱われており、今後も教師はこの文型を教える場面に遭遇することが予想される。しかし、市販の問題集の例文などでは、日本語として違和感があるものや、明らかな非文なども存在する。

2. 先行研究

「～ずにはおかない」については、金田一 (1976) が「～ないでおく」の否定として記述するにとどまり、「～ずにおかない」独自の分布や使用に関する先行研究は、管見の限り見当たらない。金田一 (1976) は、「～しないでおく」(ずにおくも同様) は意志的に動作をさけることを表すと述べている。そしてその用法から、「～しないではおかない」「～せずにはおかない」という言い方が出てきたものと思われると述べている。更に、「～ないではおかない」は「おく」と関係はあるが、語形の延長として全体で「必ず～する」「必ず～するに至る」といった意味をあらわすと述べている。

日本語教師用の文法書や学習者向けの辞典、問題集ではどのように説明されているのだろうか。(以下ではこれらを「文法書」と呼ぶことにする。)

友松他 (2010) では、「自発的作用」と「必ずする」という 2 つの項目に分けて説明されており、それぞれの用法に 3 つの例文が提示されている。6 つの文法書の記述は、表 1 のようにまとめられる。

「自発」や「意志」といった用語を使わないまでも、ほとんどの文法書が「自発」と「意志」の用例を挙げており、意味的な記述については共通するものがある。しかし、その提示の仕方は異なる。友松ら (2010) のように 2 項目を分けているものもあれば、一項

表 1 文法書における説明

	「自発」の用法	「意志」の用法
意味	必ず～という状態を引き起こす（宇民 2009） 自然にある状況になるという必然性（友松 2011）	必ず A するぞという強い意志 や決意を表す（岡本他 2008）
共起しやすい動詞の意味的特徴	感情や心理状態を表す動詞、感情の変化や争いごとの発生（グループ・ジャマシイ 1998）	記載なし
例	影響を与える、波紋を呼ぶ、感じさせる、感動させる、怒らせる など	罰を与える、攻める、逮捕する、罰する、仕返しをする、白状させる など

目として扱っているものもある。

また、共起しやすい動詞の意味的特徴などについて、言及したものは限られる。「自発」の用法については、グループ・ジャマシイ（1988）では、「感情や心理状態を表す動詞、感情の変化や争いごとの発生」と記述がある。「意志」の用法については、岡本ら（2008）で「自分の意志が向かう対象に視点があり、対象に対して何かするぞという強い意志を表す」という説明があるが、これは動詞の意味的特徴について直接的に言及したものではない。文法書の例文を見ると、「意志」の用法においては、前接する動詞は、「罰する」などのように、攻撃性の意味を持つ動詞が多いことが分かるが、実際にそのような動詞の用例が多いのであろうか。

更に、主語について言及したものも限られる。友松ら（2011）では、「強い決意を表す文では主語は一人称。必ずそうなるということを表す文では主語は無生物または一人称以外。」との説明がある。

また、使用場面についての言及は、宇民（2009）の「硬い表現で書き言葉として使われることが多い」や友松ら（2010）の「主として書き言葉に使われる」という程度である。

このように、「～ずにはおかない」の説明において、従来の文法書では、共起する動詞の意味的特徴や主語、媒体についての言及が不十分である。このような不足点を補うため、本研究では以下の問題を明らかにしていく。

1. 「～ずにはおかない」表現と共起しやすい動詞句はどのようなもので、それはどんな意味的特徴を持っているのか。
2. 新聞記事や文学作品といった媒体の違いによって、観察されやすい用法や共起しやすい語彙が異なりはしないか。

これらの疑問に応えるため、本研究ではコーパスを用いて「～ずにはおかない」がどのような媒体にいか分布し、どんな動詞句と共起しやすいのかということ調査し、明らかにしていく。

3. 研究方法

「～ずにはおかない」とそのすべての活用形が、どのように使われているかを明らかにするため、以下の形ですべて検索し、個別に分布を検討した。検索対象とした形は以下のとおりである。

- (1) 「ずにはおか」、「ずにおか」、「ないではおか」、「ないでおか」、「ずにはおくものか」、「ずにおくものか」、「ずには置」、「ずにおき」、「ずにはおき」

上記の形式をすべて検索対象とすることで、テンスや表記、活用といったバラエティをすべて拾い上げることが可能となる。

なお、「おかない」を「おけない」とおきかえた「～ずにはおけない」は、金田一(1976)で述べられている通り、「～しなければならない」という意味になるため、本研究では、考察の対象外とする。また、以下のような「～ずにはおかれぬ」も同様の理由で対象外とした。下線は筆者による。

- (2) 愛する者を、愛するがゆえに打たずにはおかれぬくるしさ……。 (丹下左膳)

各媒体の具体的な検索方法は以下に述べる通りである。すなわち、新聞記事では、朝日新聞の「聞蔵Ⅱ」データベースより、1985年以降の新聞記事を抽出した。ただし、新聞小説は対象外とした。

文学作品は、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』、インターネット上の「青空文庫」、「KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言」から、上記の表現を含む文を検索した。『新潮文庫の100冊』には日本の文学作品が67作品、海外の文学作品が33作品、掲載されているが、外国文学の翻訳も対象にした。翻訳作品を分析対象とすべきかどうかについては議論の余地があるかもしれないが、翻訳者が吟味したうえで翻訳し、日本語の文章として発表しているはずなので、日本語の文学作品と同じように分析対象とした。全100作品をテキスト化し、検索を行った。CD-ROM版には、文学作品についての解説があるが、その部分は検索対象からはずした。テキストデータを検索する際には、まず「ず」に「ないで」で検索を行い、研究対象とした表現を含む文を手作業で抽出した。分析の結果、外国文学の割合は、228例中66例だった。

青空文庫のサイトでは、「“ずにはおか”-図書カード」などのようにして検索語を指定し、検索を行った。各作品のサイトにジャンプ後、さらに同じ検索語で検索を行ったとこ

る、一つの作品の中に複数の用例が見られる場合もあった。少納言では様々なメディア・ジャンルの文章を検索可能であるが、今回は、書籍の「文学」のみを検索対象とした。

今回は、複数のコーパスにあたって、重複するデータも見られた。それらについては、一方を削除した。また、下記のような現代日本語の表現とかけ離れていると思われるものについては、対象から外した。

- (3) 浅黒いながら洪気の抜けたる顔にかかれる趣きは、年増嫌いでも褒めずにはおかれまじき風体、わがものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭ではすべきに、さりとは外見を捨てて堅義を自慢にした身の装り方、……
(五重塔)

このようにして、文学作品から 216 例を、新聞記事からは 532 例を収集した。この用例を集めるにあたっては、まず、主語が人か人以外かに分けた。主語が人以外である場合は、意志を持つことが想定されないため、「自発」の用法になると考えられるが、前後の文脈を精査したところ、「自発」とも言えない用法があった。それらについては対象外とした。一方、主語が人の場合は、「意志」と「自発」の両方が考えられるが、筆者が、文脈からいずれの用法かを判断した。なお、主語が人の場合も、文脈を精査したところ、自発とも意志ともとれない用例もあったが、それらは対象外とした。このようにして、文学作品から 216 例を、新聞記事からは 532 例を収集した。

以下、4 節において、主語別にみた用例の分析を、5 節においては用法別にみた用例の分析を行っていく。

4. 主語別にみた用例の分布

「～ずにはおかない」表現は、人が主語になる場合と、人以外が主語になる場合がある。本節では、主語が人であるか、人以外であるかについて、その割合を見ていく。主語が人の場合は、「自発」および「意志」の用法のいずれも可能である。(4) は「自発」の、(5) は「意志」の用法の例である。

- (4) このうわさは大きな衝撃を彼らにあたえずにはおかなかつた。(鯨漁場)

- (5) 自治会室の連中がこのことを知れば、現場に立ち合っていた僕の責任を追及せずにはおかないだろう。(僕って何?)

一方、主語が人以外である場合は、意志を持つことが想定されないため、おのずと「自発」の用法になる。それでは、各媒体において、主語の種類はどのように出現するのだろうか。

4-1 人を主語とする場合

以下の表 2 は、新聞記事および文学作品においてみられた主語の割合を表す。また、表

3 は人が主語となる場合について、「自発」と「意志」の割合を調べたものである。

表 2 主語の種類

	総用例数	人	人以外
新聞記事	532 例	47 例	485 例
		8.8%	91.2%
文学作品	216 例	83 例	133 例
		38.4%	61.6%

まず、表 2 を参照されたい。新聞記事にみられた 532 例のうち、人が主語となる例はわずか 47 例、つまり全体の 1 割にも満たないことが分かる。それぞれの例には、以下のようなものがある。(6) は人を主語とするような場合で、(7) は人以外を主語とするような場合の例である。

(6) 監督はザカリアス・クヌク。欧米化して、いまや忘れられつつあるというイヌイットの原像を見事に甦（よみがえ）らせている。生活の細部から精神風俗まで微細に描き、民族の文化を後世に手渡すという情熱と気迫をうかがわせずにおかない。(新聞 2003/07/10)

(7) 平面と立体を貫く透徹したデッサンの味わいはドーミエに通ずる才質を思わせずにはおかない。(新聞 2007/06/17)

次に、文学作品を見ると、216 例中、人が主語となるものが 83 例あった。その割合は、38.4%である。新聞で人が主語となるものがわずか 1 割未満だったことと比較すると、その割合は非常に高いと言えよう。

(8) もしもその悪意が、今ものうのうと口笛を吹いているならばくは…。そいつを問い詰めずにはおかないだろう。(メビウス・レター)

(9) 市場で、ぎんは「負けれせ」という呼び名で通っていた。ひね生姜一つ買うにも値切らずにはおかなかったからである。(鴻ノ巣女房)

表 3 各用法の割合 (人が主語の場合)

	総用例数	「自発」	「意志」
新聞記事	47 例	32 例	15 例
		68.0%	32.0%
文学作品	83 例	9 例	74 例
		10.8%	89.2%

表3において、新聞記事では、人が主語となる47例を更にみてみると、「意志」の用法は15例であることが分かる。残り32例は、「自発」の用法であった。新聞記事の場合、人が主語の場合も「自発」の用法のほうが多い。これは、新聞というメディアの特色上、強い意志を表すような表現はふさわしくないためだと考えられよう。

次に、文学作品における用法を見てみると、人が主語となるもののうち、「意志」の用法は74例で、89.2%を占める。つまり、文学作品においては、新聞記事とは対照的に、人が主語の場合は、ほとんどが「意志」の用法と言える。一方、「自発」の用法については、文学作品の場合、「想像をかきたてさせる」、「感じさせる」、「驚かせる」などの9例(10.8%)のみで、その割合は少ない。この点は、人が主語であっても、「自発」の用法が多い新聞記事とは大きく異なる。

4-2 人以外が主語の場合

人以外が主語になる用例は、新聞記事においては532例中485例で、割合にすると約9割である。文学作品においては、216例中、133例で、61.6%であった。つまり、新聞記事においては、大半が人以外が主語になると言える。

5. 用法別分析

4. では、主語が人かどうかに着目し、分析を行ったが、次に用法別に分析を行う。すなわち、5-1においては「自発」の用法について、5-2においては「意志」の用法について詳しくみていく。

表4 各用法の割合(媒体別)

	総用例数	「自発」	「意志」
新聞記事	532 例	517 例	15 例
		97.2%	2.8%
文学作品	216 例	142 例	74 例
		65.7%	34.3%

5-1 「自発」の用法について

新聞記事の場合は97.2%が「自発」の用法であった。文学作品でも65.7%が自発の用法であった。このように、いずれの媒体でも「自発」の割合が大きく、「自発」がこの文型の典型的な用法であることが分かる。ただ、その傾向は新聞記事で顕著であるため、「自発」の用例を考察するには、新聞記事のほうに適していると言えるだろう。以下、新聞記事の用例をもとに、「自発」の用法についてまとめる。

532 例中、自発の用法を持つものは 517 例であった。それらの例を詳しく見てみると、「影響を与える」は例全体の 1 割を占めることが分かる。さらに、「～ずにはおかない」と共起する上位 6 つの動詞句だけで 124 例を占め、これは全体の約 24.0% を占める。このことから、共起しやすい動詞句が存在することが決まっていることが分かる。上位 6 つの動詞句は「影響を与える (45 例)」、「考えさせる (21 例)」、「感じさせる (20 例)」、「思わせる (15 例)」、「影響を及ぼす (11 例)」、「ひきつける (12 例)」であった。

これらの動詞の意味的特徴を見てみると、「考えさせる」「感じさせる」などのように、心理的な意味を持つ動詞句が多いことが分かる。また、「影響を与える」、「影響を及ぼす」のように何等かの影響力を持ち、対象を変化させるような語彙が多くみられることが分かった。後者の例としては、「変化させる」や「変質させる」などもあった。

(10) しかし、このドキュメンタリーは、そんなうわべの感想にとどまることを許さない。

実に多くのことを語りかけるのである。そして、考えさせずにはおかないのである。

(新聞 1992/11/24)

(11) 自民党一党支配の終わりは、政・官・業の癒着に変化をもたらさずにはおかない。

(新聞 1993/07/08)

5-2 意志の用法

新聞記事にしても文学作品にしても、「意志」の用法は「自発」の用法ほど多くはない。しかし、文学作品の場合は、全体の 34.3% が「意志」の用法であり、新聞記事の 2.8% とは大きく異なる。つまり、「意志」の用例にあたるには、文学作品のほうが適していると言えるだろう。以下、文学作品の用例をもとに、「意志」の用法について考察を行う。

まず、「意志」の用例において (12)~(15) ように、行為の受け手が存在する用例と、(16)、(17) のように行為の受け手が存在しないものがある。

(12) たとえ地獄の火に焼かるるとも清盛を呪い殺さずにはおかないぞ。(俊寛)

(13) しかし弟子たちにとっては、その仕返しをするのは訳もないことだった。そしてかならず仕返しをしないではおかなかった。(ジャン・クリストフ二)

(14) もしかりにきみが、『ジーキル、ぼくのいのちも、名誉も、理性も、きみの一存に懸っている』とでも言おうものなら、ぼくはきみを助けるためには、ぼくの財産でも、ぼくの左の腕でもなんでも、犠牲に供して悔いない、必ず助けずにはおかないぞ、と思っていない日は一日だってなかったくらいだ。(ジーキル博士とハイド氏)

(15) 好きだよ……もういちど、あなたに会わずにおくものか (新源氏物語)

(16) 然し彼はどんな事があっても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかった。(小さき者へ)

(17) 一旦こうと思い立ったことは飽くまで貫かずには置かないという父の気魄の烈しさを感じた。(破壊)

行為の受け手が存在する例は、74例の「意志」用法のうち、53例で71.6%であった。一方、行為の受け手が存在しないものは、21例で全体の28.4%であった。このことから、「意志」の用法においては、行為の受け手が存在する場合が典型例と言えるだろう。

行為の受け手が存在する例を更に見ていくと、(12)、(13)のように、その受け手がマイナスの影響を受ける例と、(14)のようにプラスの影響を受ける例、さらに、(15)のようにプラスマイナスの判断ができない例がある。

受け手がマイナスの影響を受ける例は、(12)、(13)以外にも、「祈り殺す」、「崇りをする」、「糾明する」、「襲い掛かる」、「責めさいなむ」、「責めたてる」、「蹂躪する」などのような動詞が34例観察された。これは、受け手が存在する場合の64.2%であった。一方、プラスの影響の例としては、「尊敬する」、「ほめる」などもあったが、わずか9.4%であった。プラスマイナスの判断がつかないものは26.4%であった。

以上のことから、「意志」の用例においては、行為の受け手が存在し、かつ、その受け手にマイナスの影響を与えるような意味を持つ動詞句が多いと言える。すなわち、「意志」の用例では、攻撃性の意味を有する動詞が典型例と言えるだろう。既存の文法書における「意志」の用例でも「罰する」のように、攻撃性の意味を有する動詞句が多かったが、前接する動詞の意味的特徴について明示的に言及されていない。今回の調査によって、動詞の意味的特徴を明らかにすることができた。

このことは何を意味するのだろうか。金田一(1976)によると、「～ないでおく」は本来、「放任」を意味する。

「～ずにはおかない」を、「ないでおく」の否定と考えると「放任しない」という意味になる。そのため、攻撃性を有する動詞と共起しやすいのではないだろうか。

本節では、用法別に分析を行ってきた。「～ないではおかない」は「ないでおく」の否定形ということから考えると、「意志」の用法が「～ずにはおかない」表現の典型的な用例であることが予測されるが、今回の調査の結果、実際の用例の割合から見ると、いずれの媒体においても、「自発」のほうが多く、典型例であることが示唆された。

6. 日本語教育への応用と今後の課題

はじめにも述べた通り、教師は授業準備において、文法書や新聞記事などの事例にあたる人が多いだろう。しかし、文法書や新聞記事には、「見逃さずにはおかない」「許さずにはおかない」などの例文が存在する。

(18) 神は、おそらく、すべてお見通しで、何でも知っておられるから、いかなる違反も 見逃さずにはおかないし、いかなる善行も知られずにはいないのである。(新聞 1991/07/28)

これらは、「必ず見逃す」や「許す」などという意味になり、文脈から考えると、本来伝えたい内容とは反対の意味になってしまっている。このような用例については、松岡・岡本 (2011) でも指摘されており、日本語母語話者でも間違いやすいものである。例文の選択などにおいては、注意を要するだろう。以下では、本研究の成果を踏まえ、日本語教育現場への提言と今後の課題について述べる。

6-1 日本語教育への応用

今回の調査で、媒体によって、「～ずにはおかない」表現のあらわれ方が異なるということが明らかになった。すなわち「自発」は新聞記事において典型的に見られる用法であり、「意志」は文学作品において見られる用法であることが明らかになった。そのため、自発的な意味を持つ例は新聞記事で、強い意志を持つ例は文作作品で提示することがふさわしいと考えられる。

また、1. でも触れたとおり、今後の日本語教育文法に必要なのは、前後に共起する語彙にまで踏み込んだ調査である (中俣 2011 a)。本研究では、「～ずにはおかない」という文型について、用法別に共起する語彙を明らかにすることができた。「自発」の用法では、「考えさせる」や「感じさせる」などのように、心理的な意味を持つ動詞句や、「影響を与える」、「変化を与える」のように何らかの影響力を持ち、対象を変化させるような語彙が多くみられることが分かった。一方「意志」の用法では、攻撃性の意味を有する動詞と共起することが明らかになった。以上のことから、実際の指導においては、2用法を分けて提示し、それぞれの用法において、これらの共起しやすい語や、媒体について触れる必要があるだろう。

6-2 今後の課題

文法書などでは、「～ずにはおかない」は文末表現として提示される場合がほとんどである。しかし、実際には、以下のようなバリエーションが見られた。

(19) ～ずにはおくものか、～ずにはおくまい、～ずにはおかないぞ、～ずにはおかない
ような N、～ずにはおかない N

今後は、このような文中でのふるまいについても更に調査を行うことによって、この表現の意味についてより総合的な考察を行なっていきたい。また、今回収集した用例の中には次のようなものもあった。

(20) そういう自覚と努力とが各人自身に必要な人間が個人主義的に動き出せば、個

人主義の徹底である共同責任主義へ向わずには置かず…（平塚・山川・山田三女史に答う）

- (21) これはもともと身近な死者に対する格別の執着をどう昇華させるかという個人的な動機に発するが、書物での公表となると、別に作為的でなくてもそこに美化の作用が働かずにはおかない。（新聞 1998/10/11）

これらは、「～ずにはおかない」表現を使うよりも、「～ずにはすまない」という表現を使うほうが自然であろう。今後はこのような用例について研究を行ってみたい。

[引用文献・参考文献]

- (1) 石橋玲子（2006）『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』
- (2) 宇民美智子（2009）『日本語能力試験完全攻略問題集上級1級の文法』語文研究社
- (3) 岡本牧子・氏原庸子（2008）『くらべてわかる日本語表現文型辞典』Jリサーチ出版
- (4) 金田一春彦（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- (5) グループ・ジャマシイ（編）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- (6) 国際交流基金（2006）『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』凡人社
- (7) 友松悦子・和栗雅子・宮本淳（2010）『新装版どんな時どう使う 日本語表現文型辞典』アルク
- (8) 友松悦子・福島佐知・中村かおり（2011）『新完全マスター文法 日本語能力試験N1』スリーエーネットワーク
- (9) 中俣尚己（2011 a）「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究 —「てある」と「ておく」を例として—」森篤嗣・庵功雄（編）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp.215-233. ひつじ書房
- (10) 中俣尚己（2011 b）「コーパスを用いた質的研究の方法」森 篤嗣・庵功雄（編）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp.234-239. ひつじ書房
- (11) 松岡知津子・岡本智美（2011）「文法的逸脱に関する一考察 — インターネット上の『～ずにはいられない』に焦点を当てて —」『三重大学国際交流センター紀要』第6号（通巻第13号）
- (12) 目黒真実（監修）アスク出版編集部（編）（2008）『“生きた”例文で学ぶ！日本語表現文型辞典』アルク

用例出典一覧

- 本文中に引用した少納言の作品は以下のとおりである。

三田誠広『僕って何』河出書房新社

森鴻『メビウス・レター』講談社

- 本文中に引用した青空文庫の作品は以下のとおりである。

倉田百三『俊寛』

幸田露伴『五重塔』

島木健作『鯨漁場』

林不忘『丹下左膳』

矢田津世子『鴻ノ巣女房』

与謝野晶子『平塚・山川・山田三女史に答う』

ロラン・ロマン (豊島与志雄訳)『ジャン・クリストフ (二)』

●本文中に引用した『新潮文庫の 100 冊』は以下のとおりである。

有島武郎『小さき者へ』

島崎藤村『破壊』

田辺聖子『新源氏物語』

スティーヴンソン (田中西二郎訳)『ジークル博士とハイド氏』